年賀状

新年の挨拶として送る年賀状、若いみなさんはスマホを使ってSNSで！という方も少なくないようですが、この正月はそんな方々にも、帰省や移動などの外出の自粛の影響で年賀状が見直されたそうです。ところでこの年賀状という風習は、はたしていつ頃から始まったのでしょうか。その起源や意味をご紹介しましょう。

人類社会には古代から年賀の習慣があったようです。エジプトやメソポタミアなど、いわゆる四大文明にも、新年を祝う宗教的儀式の痕跡が多く見られます。日本ではというと、その歴史は平安時代にまで遡ることができます。平安時代の貴族、藤原明衡（あきひら）によってまとめられた往来物（おうらいもの・手紙文例集）「雲州消息」には、年始の挨拶を含む文例が数編収められており、この頃、少なくとも貴族階級の中には、離れた所にいる人への「年賀の書状」が広まっていたようです。これが我が国の年賀状のルーツといえるでしょう。江戸時代に入ると、今の郵便の先駆けとなる“飛脚”が充実し、庶民が手紙で挨拶をすることも増えていきます。また、この頃には「名刺受け」というものを玄関に設置し、不在時には新年の挨拶を書いた名刺を入れる文化も始まりました。

雑記帳

エネルギーの新スタイル

「SEWARAGE HEAT」という名称のエネルギーの仕組みをご紹介しましょう。それは“下水”を利用した従来はなかった新しいエネルギーシステムです。

社会生活に欠くことのできないインフラの一つに下水道が挙げられます。衛生・公衆環境を考えるうえでも下水道は上水道と共に重要ですが、大都市を中心にその下水を利用し、ビルやエリアの冷暖房・冷水や温水を供給したり冷暖房に利用したりするシステムが稼働しています。

下水は人々の生活排水を取り入れているため、年間を通じて温度が安定しています。また、地表より深く埋設された下水道を通るので、その温度は＜夏 28℃前後・冬 18℃前後＞でほとんど変わりません。冬の外気温が5℃ならその差は13℃、この温度差を利用します。

また、下水を処理すると有機物を含む下水汚泥が出ますが、この汚泥を焼却する際の廃熱（洗煙水）を利用する取組みも行われています。

東京では＜後楽地区＞＜新砂地区＞＜芝浦地区＞などですでに稼働しており、さらに続々とこの取組みは広がりつつあります。

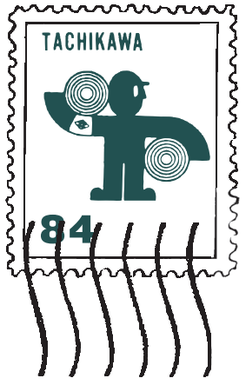
今月の使用紙 ユトリログロスマット

今月の TP 通信は大王製紙㈱の A2 マットシリーズの代表銘柄「ユトリログロスマット」を使用しています。

印刷の仕上がりを重視し、コスレにも強い人気商品です。色調はスッキリとした青白み、シャープな再現性が求められる印刷物に最適です。

■規格

g/㎡	四六版 788×1091			菊版 636×939			A 版 625×880		
	連量(kg)			連量(kg)			連量(kg)		
81.4	70.0	T	Y	48.5	T	Y	44.5	T	Y
104.7	90.0	T	Y	62.5	T	Y	57.5	T	Y
127.9	110.0	T	Y	76.5	T	Y	70.5	T	Y
157.0	135.0	T	Y	93.5	T	Y	86.5	T	Y



ユトリログロスマット
四六判　70kg
を使用しています。

TP通信 475
2021.2.21
発行／株式会社 立川紙業　〒190-0023 立川市柴崎町2-7-6 ／ TEL：042-527-6111(代)
FAX：042-528-0080 ／ HP：www.kami.jp ／ MAIL：tp@kami.jp

『相手の立場に立つ』ということ

千葉　康文

私には11歳と７歳の子どもがおります。『相手の立場に立つ』ということを日頃から子どもたちに教えていますが、その言葉が上手く伝わっているのかと言われると半信半疑なのが現実です。皆さんはいかがでしょうか。

私たちは仕事では勿論相手のことを一番に行動していますが、家族やごく身近な人たちに対し、わかっているつもりでもつい自分のことを優先して、自分本位の態度を取っているということはありませんか。

人は初めて会う人に対して、相手のことを知るために気を遣い、相手に良い印象を持ってもらおうと努力します。そして、時間をかけ、相手のことを理解し、また相手にも自分のことを知ってもらった結果、良い関係は作り上げられるのだと思います。

しかし長い付き合いの中で築き上げたその信頼関係も、ちょっとしたきっかけで崩れてしまうことがあります。一つの約束でも、先約なのに後回しにしてしまうということはないでしょうか。この人だから少しぐらい大丈夫だろうと、こちらの用事を先に済ませてしまう。この自分本位の考え方から取った行動により、相手を不快な気持ちにさせ、それまで積み上げてきた関係が時にはゼロになってしまうことがあります。

人によってはその場で謝罪すれば解決するだろうと考えることもあります。しかしこれも自分本位、相手の気持ちや自分が残した印象から貼られたそのレッテルは、相手が剥がしてくれない限り、許されたりリセットされたりすることはなく、一生剥がれないのです。

信用を失わないためには、言葉や態度に出す前に一度立ち止まり、相手の立場に立って考え行動することが大切だと思います。簡単なことですが、気持ちに余裕がないとできないことです。 昨今のコロナ禍によりマスク着用や外出自粛など様々な行動制限がある中、家族で過ごす時間も増えたかと思います。いつも身近にいる家族、そんな大切な人だからこそ『相手の立場に立つ』ということを第一に、日頃の行動や言動を見直したいと思います。

（弊社経理課長）

業界の動き

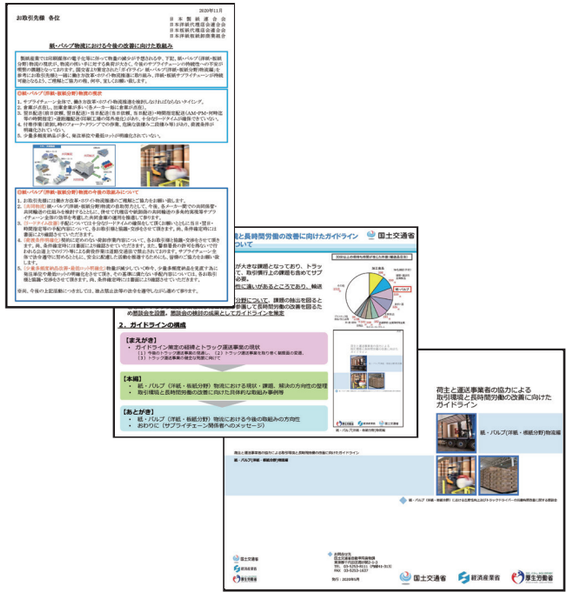
国・業界関係諸団体からの「物流の改善」要請について

先般、国《経済産業省・厚生労働省・国土交通省》及び業界関係諸団体より、長年慣行となっている紙業界の物流体制やサービスについて、改善取組みの要請がありました。国からは、以前より物流に関する改善指摘の多かった《紙・パルプ》のほか、《建設資材》《加工食品》の３つの分野を特定して要請されたもので、業界関係諸団体からはこの国からの要請に基づき作成された業界の具体的な取組みについての協力要請です。

特に運送ドライバーの労働環境改善と安全の確保や関係法令の遵守等については、運送業界全体が近年のドライバー不足・高齢化・長時間労働等により、いわゆるブラック業界と指摘されていることもあり、喫緊の課題です。その改善の具体的な例としては以下のような点が挙げられています。

- ●当・翌日配送（推奨は中一日）
- ●時間指定配送
- ●少ロット多頻度納品
- ●ドライバーへのフォーク使用や指定場所荷下ろし等の付帯作業指示（原則は車上渡し）

従来からの当社の配送体制を維持し、お客様へのサービス低下を防ぐために、これまでも全社一丸となり様々な方策を実施し、コストダウンを図ってまいりました。しかしながら印刷媒体の電子化に代表される昨今の市場の変化の流れに、昨今のコロナ禍も加わり、



弊社の自助努力だけでは限界を迎えております。

これからもお客様のご要望にお応えし、安定して商品をお届けするために、配送を始めとする社内体制の改善に引き続き努めてまいりますが、前述の改善具体例に基づき、弊社営業各担当者がお客様に「発注単位」「最低ロット」「荷渡し条件」「料金」等の配送条件について、お願いに上がる予定でおります。厳しい環境下ではございますが、その節は趣旨をご理解の上、どうぞご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今般の国及び業界関係諸団体等の要請の具体的な内容については、営業各担当者がご案内するほか、引き続き数回にわたりこの欄でご紹介してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

特別訪問記

ペーパー君と巡る「Paper World」の巻　その３

《おまけ編》

前々回よりお届けしました特別訪問記『ペーパー君と巡るPaper World』、東京都小学校社会化研究会の監修・日本製紙連合の企画によりつくられた小学生向けの副読本（2019年６月発行）の一部をご紹介してきましたが、今月はその最終回をお届けしましょう。

◇　◇　◇　◇　◇

これまでの《紙のリサイクル》《森のリサイクル》で、紙や森のリサイクルについて少しおわかりいただけたでしょうか？今回は《おまけ編》として、木材や古紙が紙に仕上がるまでの工程を見てみましょう。

紙をつくる工程は、まず木材や古紙からパルプをつくる（工場によっては国内外から調達したパルプを使う場合もあります）ことから始まります。

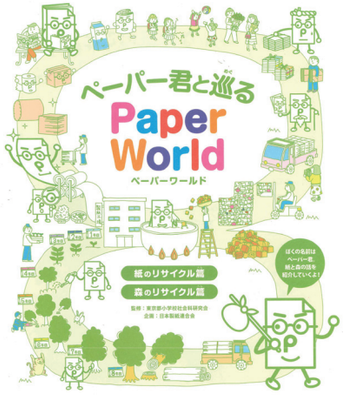
まず木材を細かくチップにして水や薬を使って煮込み、余分なものを取り除くことでパルプができあがります。この時に「黒液」という副産物もできあがります。木材のおよそ半分は木材繊維（セルロース）、残りの半分が黒液です。製紙工場ではこの黒液を燃やして電気や蒸気をつくり、紙をつくる工程で利用しています。最近何かと話題に上る代替エネルギー問題では、日本全国にある製紙メーカーの工場はどこも優等生として注目されています。

一方、市中から集められた古紙も、まず巨大なミキサーにかけドロドロにして、その中からホッチキスの針やゴミなどを取りのぞきます。さらに印刷されている古紙はインキを取りのぞき、白いパルプができあがります。

これらのパルプを水に溶かし、抄紙機という長いコンベアやローラーがいくつもある機械に均一に流し込みます。ローラーで水分をしぼったり熱を加えたり、また表面をなめらかしてだんだんといつも目にしている紙に近づきます。模様や色のついた紙も、この工程の中で型押しされたり色の素を混ぜたりして作られます。

この抄紙機から出てくる紙は、いつも使っているトイレットペーパーの何百倍もあるロール状で、これを用途に合わせた大きさに切ったり小巻にしたりして、包装すればできあがりです。

紙をつくっているメーカーは自分たちで木や森を育て増やしていること。その森で育った木は繰り返し資源として再利用できるということ。一度使い終わった紙が「古紙」として貴重な資源となっていること。それらをおわかりいただけたでしょうか。

ただしこのリサイクルも、正しく分別されていないと、この古紙もたちまちゴミになってしまいます。紙をつくる側も日々努力や工夫をしていますが、このリサイクルには皆さん一人ひとりの理解と協力が必要です。これからは使い終わった紙にちょっとした思いやりをお願いします。

（おわり）